

あいさつ

豊田市矢作川研究所 会長
鈴木 公平（豊田市長）

近年、矢作川の自然生態は、カワシオグサの異常繁茂や場所によってアユ漁の好不漁が異なるなど、私たちの想像力を超えた異常現象を毎年のように演じています。

夏休みになると毎日矢作川で遊んでいた子供の頃、矢作川の自然は毎年同じような姿であり、年長の川ガキ（川遊びが得意な子供）から代々伝授された方法で同じように魚が採れていたことを思い出します。その後、高度経済成長と共に矢作川は過酷な試練のときを迎え、先覚者の努力によって高く評価される独創的取り組みを重ねてきました。しかし、それでもなお新たな課題が現出してくるのが実態です。

毎年、地元の水辺愛護会から招かれ、市内扶桑町の古峯（扶桑町の旧地名）水辺公園で川について語り合っています。古峯地区は、三河の山々を縫って流れてきた矢作川が初めて平野に顔を覗かせ、流れが穏やかになる位置にあります。そんな立地により、名古屋と信州飯田を結ぶ飯田街道もこの地に架橋されていた時期があり、伊勢湾台風までは古い橋脚の一部が残っていました。まだ舟運が盛んな頃、古峯地区は筏師などが多く、川が生活の基盤となり、山からの木材、海からの塩など物資の中継基地として活況を呈していました。その名残で、現在でも川をこよなく愛する人々が多く、治水から環境まで川に関する知識も豊富に伝承されています。

十一年前に豊田市は全国に先駆けて近自然河川工法のモデル都市を目指した活動を始めましたが、最初の本格的河川改修場所として、愛知県豊田土木事務所（当時）が古峯地区を選定したのは的を得たものでした。その地で水辺愛護会が自然発生的に結成され、河畔林や草地の管理が行われて水辺公園がつくられ、市内外から訪れる大勢の人々の憩いの場となっています。

この古峯地区をモデルとして、矢作川を丸ごと研究するプロジェクトが、多くの皆様のご協力により三年がかりで行われ、今回の所報でその成果がまとめられました。

川を生活基盤としていた当時の生活文化のなかには、川こそが主役であり、人は川を理解してその恩恵を受けるといった思想があるように思います。それが、結果として洪水被害を抑制し、無理なく川の恵みを永遠のものとする智恵になっていたと考えられます。

川に影響を与える最大の存在は人の社会であり、それを生態系調査の一部に取り込んでいこうとする試みは、ささやかではありますが矢作川研究に新しい一歩を記せたと思っています。

引き続き関係各位のご指導とご協力を賜りますようお願い申し上げます。